一

穏やかな日和が続いた。

磐音はいつもの長屋暮らしに戻っていた。朝の間に宮戸川に鰻割きに行き、帰りに六間湯の朝湯に立ち寄る。それが近頃の磐音の贅沢になっていた。

丁子屋の白鶴乗り込みの影の護衛を務めた磐音には、四郎兵衛を通して丁子屋宇右衛門から二十五両の謝礼が出て、手代の竹造が届けてくれた。

「気兼ねなくお納めくださいとのお頭の言付けにございます」

とはいえ、奈緒の身を守っての謝礼だ。複雑な気持ちではあったが、吉原の心遣いを素直に受け取ることにした。

そのこともあって磐音の気持ちにはいささかゆとりがあった。

この日も六間湯の戻り道、神田三崎町の佐々木玲圓先生のお許しを得て道場に通おうかなどと考えながら、長屋への道を辿っていた。すると六間堀の堀端にむさくるしい格好の浪人が佇み、懐手をしながら無精髭の顎を撫でていた。

竹村武左衛門だ。

「湯の帰りか。朝から悠長なものだな」

「鰻の臭いがどうしても手に染み付きますのでね」

磐音はのんびりと答えていた。

「仕事は暇そうじゃな」

「見てのとおりです」

「手伝ってはもらえぬか。珍しく仕事が二つ重なった。柳次郎は、母者の供で柏木の縁戚に法事に行っておらぬのだ」

かまいませんよ、と磐音は請け合い、訊いた。

「どのような仕事でございますか」

「なあに簡単な仕事だ。小梅瓦町の百姓家の離れに、おとくというばば様独り住んでおる。其の用心棒じゃ」

「おばばどのの用心棒ということは、たれぞに命を狙われているのですか」

「それは道々話そう」

と武左衛門は言った。

磐音は濡れ手拭いを手にしたまま武左衛門に従った。

「当人は盗賊が金を狙っておるというのだ、なあに妄想だ。隠し金があるようなばば様ではないわ。髪は乱れ放題、湯も何日も入っておらぬ。それに、食べ物ときたら、年がら年中、小梅村の百姓家を回って貰ってきたくず野菜の塩煮ばかりじゃ。それがしも三日ほど付き合ったがうんざりした。夕餉の賄い付きで日当は三百文だ」

職人の手間賃よりもだいぶ安い。

「坂崎さん、盗賊に狙われているなんぞ、ばば様の考え過ぎだ。だれがあのようにむさいばば様を狙うものか。命を張って斬り合うことは断じてない」

「竹村さんはどちらにお仕事ですか」

「それがしも用心棒じゃ。口入れ屋に寄ったらな、うまい具合に本所松倉町の医師が住み込みの用心棒を、一日二分で探しておるという。こちらは昔の患者に脅かされているという話だ」

武左衛門は七倍の手間賃の仕事を江て、請け負っていた分の悪いほうを磐音に任せようとしていた。

「かまいませんよ」

「そうか、助かった」

武左衛門は、ほっとした声をだした。

二人は話しながら竪川沿いに東に進み、横川と交わる北辻橋際で北へ曲がった。

横川の河岸を入江町、長崎町、清水町、新坂町、中之郷横川町と本所を進めば、横川は斜めに大川へとおれて源森川と名を変える。

町名はこの界隈に二箇所、瓦を焼く竈があり、一年におよそ二十数万枚を焼いていたことに由来する。

源森川の北岸に渡ると瓦が日干しにしてある風景が広がった。

おとくの家は、瓦竈の隣に接した百姓家の離れといえば聞こえもいいが、納屋に手を加えた藁葺だった。

母屋とはだいぶ離れて、お互いに暮らしぶりを見ることもない。

「ばあさん、それがしの代わりを連れてきたぞ」

武左衛門が胴間声を張り上げると、庭の隅に筵を広げ、大根を陰干しにしていた女がゆっくりと振り向いた。

そのかたわらに蝋梅が香しい花を咲かせ、ほんのりと薄暮に浮かんで見えた。

確かに髪は乱れ放題、着ている縞柄から饐えた臭いが漂ってきそうな感じがした。だが、顔の肌には張りがあって、色艶も悪くない。

ばば様と呼ぶにはまだ間がありそうだ。

「剣術の腕前はそれがしよりも数段上だ。なにしろ神田三崎町の直心影流佐々木玲圓道場で揉まれた免許持ちだ。それに人柄もいたって謹厳実直……」

と武左衛門が大仰に磐音を売り込んだ。

が、おとくは、武左衛門の言うことなど聞き流して磐音の風体を上から眺め下ろし、

「この旦那よりはちっとはましそうじゃな」

と吐き捨てた。

「それがしの力量も知らぬくせに無礼な言い草だな」

「お前様の腕前などを見通しじゃ」